

平成27年度 第3回川崎市教育改革推進会議（摘録）

日 時 : 平成28年1月18日（月）18:30～20:30

場 所 : 明治安田生命ビル2階 第2会議室

出席者 : 小松委員、高木委員、大下委員、金崎委員、杉村委員、金委員、石橋氏（山崎委員代理）、阿部委員、中村委員

（事務局）渡邊教育長、三橋総務部長、佐藤教育改革推進担当部長、丹野教育環境整備推進室長、山田職員部長、小田嶋学校教育部長、望月中学校給食推進室長、小椋生涯学習部長、芹澤総合教育センター所長、池之上生涯学習推進課長、古内企画課長ほか

欠席者 : 田中委員、齊藤委員、堀米委員、門倉委員

傍聴者 : なし

司 会 : 古内企画課長

〔配布資料〕

資料1 社会教育振興事業について～地域の生涯学習の担い手を育てる仕組みの構築に向けて～

資料2 社会教育振興事業について～地域の生涯学習の担い手を育てる仕組みの構築に向けて～（パワーポイント版）

資料3 社会教育振興事業について 参考資料

資料4 第2次かわさき教育プランにおける点検・評価の手法について

資料5 点検・評価シート記入例（基本政策V）

資料6 平成26年度の重点施策評価シート（抜粋）

資料7 平成27年度第2回川崎市教育改革推進会議の摘録

参考資料1 川崎市教育改革推進会議運営要綱

参考資料2 川崎市教育改革推進会議委員名簿

〔次第〕

1 開会

2 教育委員会あいさつ（教育長）

3 議題（課題への対応）

（1）社会教育振興事業について ……資料1、2、3

（2）第2次かわさき教育プランにおける点検・評価の手法について ……資料4、5、6

議題（課題への対応）

（1）社会教育振興事業について

（生涯学習推進課長、生涯学習推進課振興係長説明）

委員 ・ 地域教育コーディネーターのような人がいると、様々な関係者間での連携が上手く進んでいくのではないかと思うので、地域教育コーディネーター養成について事業化して予算をつけて進めていくことが必要ではないか。

事務局 ・ 地域の生涯学習の担い手を育てるという目的に向けて、現在は仕組みづくりを整える段階にあると考えている。

委員 ・ コーディネーターの養成について、まだ事業化しているわけではないのか。

- 事務局 ・地域の寺子屋事業の中で寺子屋コーディネーターの養成は行っているが、地域教育コーディネーター養成に関しては、まだ事業化していない。
- 委員 ・実際に、地域の寺子屋などの社会教育の現場で活動をしていると、自分の持つ知識やスキルを活かすことのできる市民講師を希望する人は多いが、学校や地域の団体などの関係者と関わりあって事業を推進するコーディネーターを希望する人が非常に少ないと感じる。そのため、市民講師の養成・活用とコーディネーターの養成・活用とを区分するのではなく、市民講師の養成講座を通じてコーディネーターとしての力量もつけられるというのが理想的ではないか。
- 委員 ・資料中の「生涯学習活動が持続的に行われる仕組みづくり」という言葉について、「持続的に行われる」という断定的な表現よりも、「持続可能となる仕組み」という表現の方がふさわしいように思える。
- 委員 ・この仕組みは、ある程度年配の市民の参画を想定しているということだが、年代を区切る必要は無いと思う。若い人には若い人だからこそ持てる技術や意見があると思うし、若者の能力を発揮させて、その能力をさらに伸ばしていけるような仕組みも必要である。
- 委員 ・これからは、学びたい人と教えたい人を単純にマッチングさせるだけではなく、企画できる人が必要ではないか。市民講師が学びたい人に合わせて自らコンテンツを企画し、他の市民講師と協力しながら学習会を行うなど、学び全体をマネジメントできる人が必要だと思う。
- 委員 ・生涯学習には頻繁に関わってきている。今までは、発表会に出て終わりという自己満足的な活動や、学んだ人だけでグループを作って固定化されたものが多かったが、最近では、新しい参加者を開拓して、地域を盛り上げるにはどうすればいいか考えたり、ひとつの講座をきっかけに活動が広がるようなことがあったりと、流れが変わってきていることを実感している。
- 委員 ・市民講師の間でも知識・技術レベルに差があり、学びたい人の求めるレベルに合った講師を上手くマッチングさせるのは難しいと感じる。教えたい人の立場でコーディネートすることが、学びたい人の需要に合っているとは限らないので、学びたい人の需要に合わせてコーディネートしてもらえると良い。
- 委員 ・現在、地域の寺子屋事業に関する講座を受講しているが、地域の寺子屋事業を進めるに当たって学校と協議・調整する事項が多いため、学校関係者ではない市民が最初からコーディネーターとして関わるのはハードルが高いと感じる。市民としては、まずは講師として関わりながら、他のことにも協力できればと思っている。また、金銭的トラブルがあった場合の相談窓口など、安心してコーディネーターになれるようなシステムを整えることも必要と考えており、実際にコーディネーターとして活躍している人から具体的な話を聞く機会があると良い。
- 委員 ・志は良いと思うが、実際にどのように事業を進めていくのかを具体的に見せて欲しい。
- 委員 ・学びの場と学んだことを地域に活かす機会を作る、あるいは人と人とのつながりの場と機会を作るのがコーディネーターの役割だと思っている。そのためには、人との関係作りや様々な調査もしなければならない。この能力の育成についても市民講師養成講座のカリキュラムに組み込んで、市民講師としての能力を持った人が、その能力やキャリアを生かしてコーディネーターとしても活躍していくことができれば、大きな力になると思う。講師とコーディネーターの持ち味を横断的に活かすことのできる環境づくりが必要である。
- 委員 ・市民館の職員は、様々な講座を企画して受講者を集め、その講座をきっかけに活動の輪

を広げていくというコーディネーター機能を担っているように思われる。市民館で活躍している職員に、コーディネーターの役割について意見を聞いてもよいのではないかと。コーディネーターの具体的な役割について皆が理解する必要があると思う。

- 事務局
- ・まずは生涯学習推進課で仕組みの土台を固めている段階にあるので、今後、今日の意見を参考にしながら仕組みを整える中で、現場の声も反映させていければと思っている。
- 委員
- ・生涯学習は学校教育のように画一化された仕組みの中で進めていくものではないので、行政と市民がそれぞれ当事者として協力しあいながら、その仕組みが具体的な形になるように進めていくことができれば良い。

議題（2）第2次かわさき教育プランにおける点検・評価の手法について

（企画課長、企画課担当係長説明）

- 委員
- ・アウトカムを意識して点検・評価を行うのは非常に有意義である。個人的には、目的を深く考えることによって、それぞれの事業のあり方が見えてくるということもあるので、目標だけではなく目的を意識すると良いと思う。
 - ・実施したことを書くだけではなく、それを実施したことによる変化や他への影響について、可能な限り数値で出していけるとよい。
- 委員
- ・教育行政として行っているものの中には、即時に成果が出ないが長期的に見て重要な取組をしているものもあると思う。成果はまだ出ていないものの取組としては上手く進んでいく見込みである、というものについても評価することが望ましい。
- 委員
- ・教育に関する行政や学校教育は、非常に成果が見えにくく、すぐには成果として現れにくいため、児童生徒や保護者、市民のためになっているのかどうかを適切に示すことは難しいと感じている。
- 委員
- ・点検・評価シート記入例において参考指標が示されているが、この数値がどのように集められて、どのように表現されているのか明確にしなければ、取組成果と結びつかないのではないかとと思う。
- 委員
- ・学校教育推進会議では学校評価を扱う機会があるが、教員側の自己評価と生徒側の評価が乖離している場合にどのように評価を行えばよいか悩んでいる。
 - ・評価する際の考え方について、関係者の間で共通理解されているのか疑問である。数値が一人歩きしてしまっていて、高い数値であればあるほど良いという考えがあるのではないかと。そのような考えがあるのであれば、逆に低い数値がつけられた項目に注目すると新しい発見があるかもしれない。
- 委員
- ・学校現場では、保護者や生徒からのアンケートなどを材料にすることで、客観的な視点から学校を見て、学校の良い部分や課題を見つけられるよう、学校評価を行っている。教育の成果に関しては、数値として表せるものと表せないものがあるので、どれだけ客観的な資料が用意できるかが重要ではないかと。
- 委員
- ・定量評価と定性評価をバランスよく用いて評価することが大事、という考え方について同意見である。教育について評価する際には年度ごとの数値のみで評価するのでは不十分ではないかと思っているが、定性評価とのバランスのとり方についてはどのように考えているのか。

- 事務局 ・ いじめへの対処を例とすると、最終目標である「いじめの解消」のためには、いじめに対して敏感になることが求められ、その結果、いじめの認知件数が増加することになる。そこでいじめの認知件数を増やすことを目標にすることは出来ず、むしろ件数が多いことはマイナス評価につながりかねないが、いじめを敏感に感じ取ることができないと、最終目標の「いじめの解消」を達成することができない。事業のどの段階でこういった目標を設定するかが重要であると考えている。
- 委員 ・ 企業で新しく物を作る際、最初は初期不良が頻繁に起きる。綿密な試験をすればするほどエラーが出るが、エラーを出したくないから試験を止めようという考えはなく、むしろ、エラーを出し尽くすために厳しく試験をしなければならないという考えがある。事務局が言ったことはこの考えと同じであり、大切なのは、多くの人がこの考えを共通認識として知ることである。
- 委員 ・ 現場には、評価という言葉に対してマイナスのイメージがあるので、「学校評価」ではなく、「学校診断」のように、組織を人間になぞらえて、健康で活き活きと活動しているかどうかという視点があっても良いと思う。
- 委員 ・ 「評価」という言葉は、日本語で言うと1語だが、英語では「エバリュエーション (evaluation)」と「アセスメント (assessment)」の二語あって、それぞれ前者には「値踏みする」、後者には「支援する」という意味がある。学校評価が制度化されたときに「評価」が「エバリュエーション」の方として捉えられて、学校評価とは学校を値踏みするものだと考えられてしまった。そのため、学校現場では「評価」に対してマイナスのイメージがあるのではないか。これからは評価のあり方を見直して、「アセスメント」の方、つまり学校をどのように支援していくかという目線で行うことが必要である。
- 委員 ・ 評価の中にアウトカムを入れたことは非常に評価できる。そこで、なぜ効果が上がったのか、なぜ成果があったのか、また、今後はどのように進めていくかという点を書き入れていけると良い。良い点を見つけて、さらにそれを皆でどう成長させていくか、という形の点検・評価になると良い。
- 委員 ・ アメリカでは、市民が作った「学校」に対して後から税金を投入するというシステムだったために「エバリュエーション」の評価によって学校として認証する必要があった。日本では、最初から整えられた基準の中で学校を作って教育行政を行っているので、値踏みするというよりは、市民として、適切に行政サービスを行っているかどうか確認し、引き続き事業を推進して欲しいというお願いをするものだと思っている。
- 委員 ・ そのため、点検・評価をするにあたっては、事務局側の自己評価が非常に重要である。行政がプロフェッショナルとして仕事をやっている以上、自分たちの仕事について責任をもって行い、振り返りとしての自己評価ができなければならない。川崎市の教育行政が本当に子どものため、市民のためになっているかどうか、今後も会議を通じて議論をしていきたい。